年間第２主日

福音朗読　ヨハネ２・1-11

2025.1.19　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日、年間第２主日のごミサをお捧げしていますけれども、年間第２主日には毎年このヨハネの福音書の中からカナでの婚礼での出来事が朗読されます。

そこでは、婚礼の中でぶどう酒が足りなくなったという状況で、しかしイエス様が上等なぶどう酒をその人々にお与えになったという、その出来事なわけです。「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使たちは知っていたが、世話役は知らなかった」（ヨハネ２・9）っていうふうに出てきますけども、この「水をくんだ召し使い」というふうに言われているのは、ただそこにいた働いている人というよりは、直訳すれば「仕える者」っていう意味になって、つまりイエス様の言葉に従って仕える者というのは弟子たちのことを表していると考えるのが自然なんです。でも「召し使いたち」って訳してしまうと何か別の人たちかのように思いますけど。

つまりは、マリア様――イエスの母、ヨハネの福音書では一貫してイエスの母というふうに呼ばれますけれども――や弟子たちはイエス様の力によってその婚礼が滞りなく終わった、あるいはその上等なぶどう酒が与えられたということを知っているけども、それ以外の人たちはとにかく婚礼が無事に済んだということは当たり前のように受け取るということなわけです。そこに恵みの業（わざ）を見ることはできませんでした、という流れです。

イエス様が示された最初のしるしであるのに、ということなんですが、でも後で、今度イエス様を通して自分たちが与えられたということを目にしたとき、それは、今日のが最初のしるしとしたら、４番目のしるしは 5000 人の人が、わずかな食べ物を、でもイエス様の手から配られたならば、みんなが満腹したっていう、その出来事は、まさにイエス様を通して自分たちはパンを与えられたということを体験する。でもその体験した人たちは、「また同じようにパンを出してください」っていうふうにして次の日もイエス様のもとにやって来る。でもイエス

様は今度はパンを与えないので、人々がいなくなってしまうっていう、そういうような流れなんです。

で、福音書は、このようにして与えられるぶどう酒やパン、またイエス様が病人を癒される、そういう力はどこから来るのかというのを最後に種明かしします。それは、イエス様がご自分の命を人々に与えたからなんだ。その十字架を通してなんだ。「イエス様は神様だから簡単にやってくれるでしょう。だからまたパンをください」って人々は集まって、あるいは「また癒してください」。しかしそれは、イエス様がご自分の命を削ってなさった業なんだということが後で明らかになってくるわけです。

じゃあわたしたちは、そのことを示された者として、どのようにイエス様との関係を結ぶのか、と福音書が問いかけてくるテーマです。それは実は神様との関係、イエス様との関係なんですけども、それを通して、わたしたちは実は他の人とどのように関係を結んでいるのかということも反省させられる、そういう入口になると思うんです。

福音書では、イエス様がご自分の命を削って恵みを与えてくれる、でも周りの人がそのことに気づかない、あるいは気づいても当たり前のものとして受け取り、「またやってください。またおんなじように」っていうふうに求め続ける。しかし、相手の苦難であるとか犠牲を払って恵みを与えてくださるっていうイエス様の十字架には目をやらない。

そういう関係ではない、弟子たちのようにその業の中に恵みを見、しかしその恵みそのものの中に、イエス様の十字架の犠牲を通して与えられたものとして、日々のすべてをわたしたちは深く感謝して受け取らなければならないんだということを思うときに、他の人との関係においても、周りの人がやってくれている色々なことに気がつかない、あるいは気がついても当たり前と思う、そしてその相手が自分のために払ってくれる色々な犠牲や、あるいはその相手の苦しみには目をやらない、そういう関わり方をしていたならば、イエス様はそうであっても共にいてそこで待っていてくださるけども、人間同士だったらば、周りからみんないなくなってしまう。それは自分で自分の不幸を招き寄せるというようなことになりますね。

ある人生相談というか記事の中で、お母さんが、「自分の娘がその娘の子どもたちの世話をわたしに任せっきりにしています」とそんな記事が出ていました。

それで、すべて、学校のこととか食事の世話も全部任せられて、最初のうちこそ「ありがとう」と言っていたけども、それがだんだん当たり前のように振る舞ってきて、しまいには「専業主婦なんだから、このぐらいやる時間があるでしょう」みたいなことを言い出して、もう今ではその孫の世話ということが大変を通して、娘を憎む気持ちが芽ばえていますけどもっていう、そういうような苦しみの記事がありました。本来の喜びであるはずの子どもたちを通して、でも、親子の関係がおかしくなっちゃうのは、相手の犠牲に思いやらないし感謝しないっていうことから来ます。

わたしたちは、イエス様との関係を見直すように招かれているということは、実は神様との関係を通して、自分が他の人とどのようなつながりを持っているのかを見直していくっていう、そこへの招きなんではないかと思います。聖書は、キリスト教は、神様との関係が正しくなるならば、周りの人との関係も正しくなるし、神様との関係が切れるならば、周りの人との人間同士の関係も切れるのだということを度々訴えます。それはやはりわたしたちが神様の前にその恵みに対してどのような態度を取るのかということは、周りの人に対してどういう態度を取るのかということとつながってるんだということのように思います。

わたしたちが今日、絶えずイエス様を通して与えられる恵みの前に、イエス様との親しい交わりを通して、でも感謝のうちに信仰生活を送るようにいつも呼ばれているということを意識するときに、それを通して他の人とのつながりも見直しながら、本当の意味で互いが助け合いながら喜びを分かち合える、そういう神様を通して与えられる恵みに達することができますように、その回心の恵みを願いたいと思います。

神様と、そして人とのわたしたちの関わり方を絶えず振り返りながら、それを正していくことを通して、それが本当の意味で喜びの源になりますように、その導きの恵みをこのごミサを通して願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/